

## 松江歴史館のおひなさま

もうすぐ桃の節句です。節句にちなみ、松江歴史館の所蔵する様々な雛人形<sup>ひなにんぎょう</sup>を紹介します。



ほうこ  
這子（江戸時代）

は  
這う子どもをかたどった布製の人形です。平安時代の貴族の間では、お守りとして幼児のかたわらに置かれ、幼児に降りかかる災厄<sup>さいやく</sup>の身代わりとさせていました。雛人形の原形といわれ、雛人形とともに飾られることもありました。

かみびな  
紙雛（江戸時代）

紙で作った立姿<sup>たちすがた</sup>の雛人形です。立雛<sup>たちびな</sup>ともいいます。紙や藁<sup>わら</sup>を芯にして頭を作り、それに胡粉を塗って目鼻を描きました。

江戸時代初期は、現在の雛人形のような内裏雛<sup>だいりびな</sup>ではなく、紙雛だけが飾られました。内裏雛が出回るようになるとともに飾られるようになりました。神社などで行われる祓<sup>ひとがた</sup>の際の人形のおもかげを持つ、古い信仰に根ざした人形です。



きょうほうびな  
享保雛（江戸時代）

江戸時代になって完成したと考えられているのが、座り姿の雛人形です。人々の宮中へのあこがれから、御所衣装をまとった雅な姿となり、天皇と皇后を意味する「内裏」雛と呼ぶようになりました。

享保雛は、享保年間（1716～36年）

頃に流行した内裏雛で、それまでと比べ大型で豪華な人形だったため、幕府が制作を禁じました。町人の間に雛飾りの行事が広まっていたとみられます。

